

川越街道ウオーク【V】ふじみ野駅(上苗間バス停)から川越駅まで

歩行距離 約10km

集合場所 ふじみ野駅改札口

集合時間 午前9時50分

東武東上線ふじみ野駅10時01分発のバスに乗り約3～5分、**上苗間バス停**で降り、国道254号線(川越街道)に向かう。東入間警察入口信号交差点で国道の反対側に渡り北上する。直ぐ左側に大井小学校があり、校門の先に「旧大井村役場」の建物がある。

旧大井村役場庁舎

竣工は、昭和一二年五月、木造二階建、玄関ポーチの上部ベランダが廻され、外壁はモルタル塗、屋根はトタンスレート葺(建設当初はスパニッシュ瓦)で寄棟でサイレン塔がついている。1階は事務室、2階は村議会議場である。

昭和四十七年(1972)に現在の庁舎が出来るまでの35年間役場庁舎として使用された。その後、東入間警察署として利用され、またその後は大井小学校の特別教室や埋蔵文化財整理室として利用され、平成14年(2002)に国登録有形文化財となりました。

次の信号の先で旧川越街道は国道254号線を右に分け左の細い旧道へと入っていく。この分岐に「馬頭観音」があったとのこと。今は、この先の「神明神社」の西隣に移されている。次の信号を右折し直進するとふじみ野駅に行く。旧道を400m程進んだ「角」と呼ばれた信号交差点(大井総合支所入口)の手前右角に享和二年(1802)建立の道標を兼ねた立派な「常夜燈」がある。

常夜燈の正面には「奉納 阿夫利神社常夜燈 亀久保中」、左側面には「大山 武蔵野地蔵 ところさわ 道」、右側面には「享和二年壬戌三月吉日 明治参拾丁酉稔八月再磨之」と刻んでいる。

角の常夜燈

旧川越街道と地蔵街道の交差するこの地を、「角(かど)」と呼びます。丹沢の霊峰大山の阿夫利神社へ参詣つする際に、亀久保村から最初の曲がり角に建つ常夜燈なのでこの名があります。

この常夜燈は、享和二(1802)年に建てられたもので、明治三十(1897)ねんには、笠石と台石部分が再建されています。当時は街道の中央におかれ、夜になると火袋に灯を上げて農作物の収穫を祈りました。

道標もかねており、ここを起点に役場に向かう道が大山道で、地蔵街道とも呼ばれ、三富開拓(上富は、亀久保村から移住した四八軒が開発にあたる。開発名主は亀久保村の組頭三右衛門＝後に忠右衛門と改名)のために開かれた道です。農作物の神と雨降りの神をまつる大山参拝をはじめ、富の地蔵様へのお参りに利用されました。

ここ「角」から直線距離で3.2km南西に行った所に「木ノ宮地蔵堂」があり、「地蔵街道」は亀久保村から「地蔵堂」への信仰の道であった。現在も「地蔵通り」として通行の多い道路として残り、利用されている。

ここで、街道から離れ、地蔵堂の方へ頭の中だけで行ってみよう。

もし、行かれるなら、「ライフバス」ふじみ野駅西口発9時30分、鶴瀬駅西口行に乗り、多福寺バス停下車

(9時47分着)、帰りは「ライフバス」多福寺バス停発10時50分、ふじみ野駅西口行に乗るのが良いでしょう。

地藏街道

木ノ宮地藏堂境内から北東方面へ雑木林を抜け、大井町亀久保方面に続く道が地藏街道と呼ばれる。地藏街道は三富開拓以前の古地図に木ノ宮地藏堂脇を貫通するように描かれており、この道の成立は中世にまでさかのぼると考えられる。

地藏街道は広大な武蔵野を往来する人々の生活道や信仰の道として、三富開拓以前から重要な道であったため、整然とした区画がおこなわれた三富開拓によってその姿を消すことなく、現在まで生き続けている。

木ノ宮地藏堂

木ノ宮地藏堂(武蔵野地藏堂)は“富の地藏様”として、古来より人々に親しまれている。江戸時代に書かれた古文書によると、延暦二四年(805)坂上田村麻呂が北国遠征の際、武蔵野で道に迷ったところを地藏菩薩に助けられ、その加護に感謝し地藏堂を建立したと伝えられている。また、寛永十九年(1642)の焼失した堂宇を三富開拓が終了した元禄九年(1696)に開拓農民が出資して御堂を再建したが、七〇年ほど経つと破損がひどくなったため、明和六年(1769)に川越藩に地藏堂の再建を願い、安永六年(1777)に現存する地藏堂を完成させたと記されている。

地藏堂は、間口六間・奥行七間の方丈造りで主要材のほとんどにケヤキを用い、須弥壇も総ケヤキ造りで見事な浮彫りが施されている。また、内陣の格天井には地元の絵師鈴木本英による一〇七枚の植物画が描かれている。当時、総ケヤキ造りでかつ、見事な天井絵を描いている建物が建立できたということは、三富新田開拓の成功と経済的な豊かさを示しているようである。

木ノ宮地藏は、縁結び、子授け、子育てのお地藏さまとして信仰されており、堂内には多数の絵馬が奉納されている。毎年四月二三・二四日と八月二三・二四日の縁日には多くの参拝者と出店で賑わいを見せ、昔と変わらぬ信仰の厚さを物語っている。

平成十一年三月三〇日

三芳町教育委員会

三芳町文化財保護審議委員会

縛られ地藏

雑木林に囲まれた「多福寺」の境内にある木ノ宮地藏は、「富の地藏様」とも呼ばれ、古くから人々が親しみをもって接してきました。そのため、地藏様にまつわる逸話がいくつか伝わっています。

『むかし、富の地藏様は夜になるとこっそりお堂を脱け出し、村々に出没するという噂が広まりました。

檀家の者たちが集まり、「御本尊様が脱け出しちゃ、しかたなかんべえ」「何か悪いことでもしなければいいのだが」と心配しておりました。そのうちに、上富、中富、下富よりもっと遠くの村までお地藏様を見たというものが出てきて、悪い噂が絶えませんでした。

さすがに寺の者もほおっておけなくなり、檀家の人たちとも相談し、お地藏様を鉄の鎖で縛ってしまいました。それからは、もう二度と、お地藏様が夜に出歩くという話は聞かれなくなりました。』

(後略)

—童話作家・池原昭治著 増補改訂版『埼玉のお地藏さん』(昭和六十二年刊)より—

木ノ宮地藏奥之院の石地藏（町指定文化財）

奥之院石地藏坐像は、江戸時代初期に製作され、現在入間東部地区に残る石地藏の中では最古のものである。背面には「奉再造（ふたたびつくりたてまつる）武州入東郡（にっとうぐん）木宮地藏菩薩大権現像 寄進古尾谷木目郷（ふるおやきめのごう・現川越市木野目）杉山長五郎 為二世安楽子孫繁栄也 時寛永一九壬午年（一六四二）雪月吉日」と刻まれている。

文献によると寛永十九年に地藏堂が焼失したと伝えられ、この石地藏が堂宇焼失直後に奉納されたと見ると、三富開拓（元禄七年・一六九四）から遡ること五〇年以上もの昔、人の住まない武蔵野の原野の中にたたずむ木ノ宮地藏はすでに人々の厚い信仰を集めていたことが窺える。

多福寺へ寄ってみよう。

多福寺

三富山多福寺は、臨済宗（禅宗）京都妙心寺派の寺で、元禄九年（一六九六）川越藩主柳沢吉保により、開拓農民の菩提寺として上富地藏林の中に建立された。本堂と庫裡は、建立以来二度の火災にあい、現在のものは、明治三年（庫裡）同十六年（本堂）に再建されたものである。

境内は、総門からまっすぐのびた参道と、その先に建立された山門には十六羅漢が人々の喜怒哀楽の表情を湛えて安置されており、元禄の銅鐘（埼玉県指定文化財）、天保時代の穀倉、開拓当時の井戸が残されている。また、本堂裏の庭園は元禄期の造園になる枯山水で、訪れる人を静寂の中へ誘ってくれる。

昭和六十年三月

埼玉県

三芳町

旧川越街道に戻り、角の常夜燈から旧道を350m程行くと、右手に「地藏院」がある。

地藏院

新義真言宗木宮山地蔵院。新座市大和田普光寺の末寺。武蔵野地藏院とも呼び、別名佉羅陀山薬王院とも称する。正和三年（1314）十一月覚応の開基という。

鎌倉～南北朝時代の武将二階堂氏が、鎌倉末期の武蔵野の戦の折に不思議の靈験を見たので再興し祈願寺としたという。本尊は二尺五寸（約七六cm）の地藏尊座像。昭和二七年火災により、江戸時代文化年間（一九世紀初）建立の本堂（間口八間半・奥行七間半、建久・建仁（十二世紀末～十三世紀前半）の仏具、江戸時代の大般若経六〇〇巻が同時に消失し、焼け残ったのは本尊と山門だけである。

幕末まで六郷氏（二階堂氏）の庇護があったと言われる。江戸時代参勤交代の折に休憩所として使われたともいう。昭和初期まで毎年八月に大般若会が行われた。

弘安五年（1282）・建武三年（1336）の板碑が、昭和一五年新道（川越街道）建設工事の際に発見され、現在当院に保管されている。

本堂向かって左にある薬師堂の本尊は島田氏の大本家のおばあさんの夢枕に現れ、「しょうじん場」(江川)より掘り出されたと伝えられている。秘仏であって、見た人はいないまま昭和二七年の火災で焼失した。今では一寸八分(約5cm)の石の慈眼菩薩が祀られている。毎年九月八日が縁日で、眼の病に利益があるといわれている。

一九八五年

ふじみ野市教育委員会

境内に入った左に「無憂樹」と六地藏があり、右手に「しだれ桜」がある。

ふじみ野市指定文化財 天然記念物

地藏院のしだれ桜

昭和五十三年四月一日指定

樹 高 六・三メートル
目通り周囲 二・七メートル
根回り周囲 三・九メートル
枝張り(西側) 七・五メートル

ふじみ野市の天然記念物に指定されている地藏院のしだれ桜は、春の彼岸に花を咲かせる江戸彼岸桜の変種で、樹齢は三百五十年前後(江戸時代中頃)と推定されています。(後略)

平成十一年九月

ふじみ野市教育委員会

地藏院から200m程で国道254号線と合流する。その手前の左の道を入ったところに「亀久保神明雲神社」の参道がある。

亀久保神明神社

当社の正確な創立年代は不詳ながら、慶長三年(1598)の創立で、大日靈貴尊(おおひるめむちのみこと・天照大神)を祀り、当初より村の産土神として崇敬されています。

新編武蔵風土記稿などから、地藏院が当社の別当をつとめていたことが明らかです。

口伝によれば天文一五年(1546)四月二十日川越野戦(上杉氏と北条氏との戦い)の時敗れた斉藤利長、信洋親子(斉藤別当実盛の子孫)は入間郡野老沢(所沢)に住みつき一族の武運隆昌を祈って弘治二年九月二十一日京都より所沢に神明神社を勧請したといわれています。信広より六代目の次男勝之丞は出家して息海法印と称して亀久保地藏院座主となり、享保年代に所沢の神明社を木の宮稲荷社の地へ勧請し、自ら地藏院別当となったということです。

かつては、境内に周囲一丈三尺(4m)ほどにおよぶ老杉があり、古社としての風格を色濃く残していたといわれます。

拝殿には、宝暦八年(1758)・明和二年(1765)・寛政十一年(1799)などの古い大絵馬を奉獻するほか、境内に天保十二年(1841)の手水鉢や、力石四十貫(一六〇kg)と三十貫(一二〇kg)の二つが現存しています。

明治五年(1872)の社格制定の際、古社であり、また一村の鎮守であることから村社となりました。

大正十二年(1923)四月に神饌幣帛料供進神社に指定されました。昭和四年(1929)本殿裏に古神札納所が設置され、さらに昭和八年(1933)社務所が改築されました。

その後、昭和三十二年(1957)四月、拝殿と幣殿が老朽化したため、氏子の寄付によって再建されました。その際、解体した梁木に文化期(1804~18)の鷹匠の墨書が確認されたといわれています。

なお境内社には、天保十二年(1841)正月創立の八坂神社と、明治四十年(1907)五月九日に武蔵野より移転した稲荷神社とが祀られています。(後略)

本殿右奥にかなり太い古樹の「御神木」の切株が覆屋の中に置かれ、2個の「カ石」は本殿の右手にある。神社を出て、道を右に入った右手に、大井小学校傍の国道と旧道の分岐に昔あった「馬頭観音」が祀られている。

亀久保の観音様(馬頭観世音)

馬頭観音は、明治二十六年、お堂は明治三十二年に地元の二十数人の人々によって、亀久保の最南端(現大井小学校脇)の川越街道沿いに建立された。亀久保の馬頭観音については、昔から小栗判官に関する話が残っているが定かではない。また、大和田宿の鬼鹿毛伝説に関りがあるとも伝えられている。その昔、三人の武士が早馬で江戸を目指して走っていたが、川越の伊佐沼まで来た時、一頭が倒れ、亀久保まで来た時にまた一頭が倒れ、残るは只一頭。然し、大和田まで来た時、疲れ切った馬は松の根につまずいて倒れてしまった。ところが倒れた馬は、やにわに立ち上がり主人を乗せて江戸までの使いを果たさせ、そのとたん消えていなくなってしまったという。不思議に思った武士が帰りに大和田まで来たところ、馬は確かに死んでいた。「さては幻が私を乗せて大事な使いを果たさせてくれたのか。」感動した武士は手厚く葬ってやったという。この馬が有名な鬼鹿毛でという名馬である。この三頭のうちの一頭がこの馬頭観音であるといわれている。

馬頭観音は、大正期に神明神社へ、更に昭和七・八年頃現在地へ移されたものである。お堂の中には厨子があり白木の観音様が祀られていたが、一時なくなって今は金色の観音様が祀られている。

国道254号線に合流し、亀久保交差点を過ぎ200m、「R254 川越駅まで4.9km 85分」の標柱がある。(亀久保交差点を右折し一本先の左の道を230m程行くと公園があり、トイレ、ベンチがある。)

次の上福岡駅西口入口交差点から400m強で歩道橋がある国道と旧道が分岐する。分岐点の手前左に入る道があり、その角に「芝開き地蔵(鶴ヶ丘厄除地蔵尊)」がある。

「奉 建立地蔵菩薩念仏供養菩提也

此地芝開三名厄除地蔵尊施主都古人

元禄七甲辰年十月九日武蔵入間郡霧ヶ岡邑」

芝開き地蔵の道の先に、「鶴ヶ丘八幡神社」がある。

鶴ヶ丘八幡神社

江戸時代、このあたりは「鶴ヶ丘村」と呼ばれていました。正保年間(1644~8)の検地帳に

は村の名は見えず、貞享三年(1686)に検地実施の記録があるので、その頃には鶴ヶ丘村が成立したと考えられます。参道入内にある「芝開き地蔵尊」は、元禄七年(1604)に鶴ヶ丘村の人々によって建立された地蔵で、村の開拓を伝える貴重な資料となっています。

鶴ヶ丘八幡神社の祭神は誉田別命(ほむたわけのみこと)で、切妻造りの拝殿と神明造りの本殿を配しています。境内には稲荷神社・八坂神社・御嶽神社もまつられています。石でつくられた鳥居は、文化八年(1811)六月の建立です。

鶴ヶ丘八幡神社についての詳しい沿革はわかりませんが、文政十一年(1828)に成立した「新編武蔵風土記稿」によると、「八幡社 村の鎮守なり 亀久保地蔵院の持(もち)」と記されていることから、鶴ヶ丘村の鎮守として祀られていたことがわかります。この当時は神仏習合の時代であるため、文政期(1818~30)には亀久保にある地蔵院が管理していたことがありました。

なお、この地域一帯は今から四千五百年ほど前の縄文時代中期の遺跡が確認されています。
平成三十年三月

ふじみ野市教育委員会

国道から分かれ、旧道に入る。ここから川越市となる。(次の信号を右折し国道を横切り、ファミリーマートのある交差点を左折。150m程の右側に熊野町公園があり、トイレ・ベンチがある。)

旧道を進み、大谷石の塀、薬医門を構えるお屋敷の先、右側の「いもせんべい屋あらい」の店先の藤棚の下に「旧川越街道 藤馬中宿跡」の標柱がある。ここ辺りに「間の宿」があったのか。

せんべい屋を過ぎ、道は上りとなり、信号の先・左に「東光寺」がある。

東光寺

曹洞宗医王山東光寺は、江戸時代初期から元禄年間(1688~1704)まで藤間村の地頭であった米津彦四郎が、慶長十五年(1610)に開基。寛永二年(1625)に僧・舟海久吞が中興開山となった寺。渋井(古谷地区)の蓮光寺の末寺である。本尊は坐像の薬師で、安阿弥の作と伝えられる。

江戸時代初期までは藤間の集落が国道の東側、寺尾に接した辺りにあったので、この寺も東久保にあったが、元禄十六年(1703)、川越藩士で柳沢吉保の家臣・柳沢帯刀保誠によって現在の場所に移されたことが本堂にある銅鐘銘文によって知れる。この寺にはもう一つの本尊として阿弥陀仏がある。

本堂の左手の覆屋の中に六地蔵が並んでいる。

東光寺から200m強進んだ逆Y字三叉路の角の覆屋の中に「開明地蔵大菩薩(首切り地蔵)」が祀られている。

首切り地蔵(開明地蔵大菩薩)

地蔵は、宝永六年(1709)三月の建立で、川越藩の「御仕置場跡」、処刑場があった場所である。仙波、小中居上留村、上村、留村、二ノ関の各村から二人ずつの僧と、近くの村に住む有志が建てたもので、一名「首切り地蔵」とも呼ばれている。元は烏頭坂の近くにあったが、段々人家が出来、江戸時代中期になってこの地へ移したのだという。

街道は下りとなり、右の市立高階中学校の対面左側に一階が柱のみの住宅と塚のようなものが見え

る。駐車場の奥の塚の上に祠が見え、階段の下に「吉田神社」の石柱がある。また、「吉田次兵衛政次翁命之奥城」の標柱がある。

吉田神社

この神社の詳しいことは一切わからないが、『川越城主松平伊豆守信綱の家臣吉田次兵衛政次が、自分の所領地であったこの地に、秘蔵していた武具を埋めて塚を築いたもの』と言われ、「川越の民話と伝説」には、『この社の御祭神となった吉田次兵衛政次が、榛名神社の申し子を自分の子供として大事に育て、やがて此の地で木食上人となったので、榛名湖の竜神が次兵衛塚のある砂新田だけは雹や雷雨、集中豪雨の被害から守っている。』という伝説が残っているという。

坂を更に下り、いちよう通りを横断し26・70m進んだ右にファミリーマートがある十字路を左折、6・70m入った所に「砂新田公園」があり、トイレ・ベンチがある。

十字路から100m程右側に高階郵便局があり、そのすぐ先右側に「砂新田春日神社」がある。

春日神社

この神社は、小規模の神社だが、石垣の上の境内は、古墳の上に建てられているとも言われる通り、近隣から比べるとここだけが盛り上がった感じがする。鞘堂内の本殿は江戸彫彫刻で飾られた一間社流造で、側面には彫りの深い素晴らしい彫刻が施されている。

御祭神：天児屋根ノ命、比売ノ神、経津主ノ神、武甕槌ノ命

境内社：八坂神社、稻荷神社

由緒：旧村社で砂新田の産土神です。慶安年間(1648～52)の創建と伝えられ、子供の成長を願う神として崇敬されています。

砂新田春日神社本殿(市指定・建造物)

江戸彫彫刻で飾られた小型の一間社流造で、屋根はこけら葺きを模した板ぶきです。覆屋は三方に高欄を付けた舞台風の作りになっている。彫刻も細かく手の込んだ物で、全体的に工芸品を思わせる作りになっている。壁面の彫刻は、左側面が竜と琴を弾く婦人、右側面は虎と翁と童子で、背面にはなく、立体感があります。「東都彫工嶋村俊正(花押)」の刻銘がある。

街道は信号で県道8号線を横切ると「不老川(とすとらずがわ・ふろうがわ)」に架かる「御代(ごだい)橋」を渡る。不老川は元々は「とすとらずがわ」で、江戸時代に編纂された「新編武蔵風土記稿」では「年不取川」の表記を用いている。

「とすとらず」の由来

雨が少ない冬になると干上がってしまい、太陰暦における年のはじめ(旧正月・春節)には水が流れなくなる。このため旧暦正月に全員が1歳ずつ年齢を重ねる数え年の習慣における加齢の際にその姿を現さないため「年とらず川」あるいは「年とらずの川」と呼び習わされている。また、干上がった川の橋の下で一晩を過ごす、年齢をとらないといわれる伝承があり、そのことから、「とすとらず川」といわれるようになったともされる。

水源は、東京都瑞穂町の狭山池の伏流水とされる。そこから北東に流れ、入間市宮寺・藤沢、所沢市林、狭山市入曽・堀兼、川越市今福を流れ、林川・今福川・久保川などを合わせ、川越市岸町と川越市砂の境界で新河岸川に合流する。

不老川御代橋から300m程の左手に「長田寺(ちょうでんじ)」がある。長田寺は曹洞宗で山号を月村山と称する。山号は、この村の地形三日月形であることからとのこと。開基と伝えられる長田金平は、当地岸村の地頭で、ここに屋敷を構えていたという。彼は後北條氏(小田原北條氏)の家臣であったが、後に徳川氏に仕え、慶長元年(1596)に没した。位牌がこの寺に残っている。

街道は上りとなる。左に森が見えてくる。「熊野神社」の石の階段の登り口に「烏頭坂」の石柱があり、隣に解説板がある。

烏頭坂(市指定・史跡)

旧川越街道を岸町から新宿町二丁目・富士見町へ上る坂道で、往時は杉並木がありうっそうとしていた。新河岸川舟運が盛んな頃は、荷揚げされた荷物を市内の間屋街に運ぶときに必ず通らなければならず、難所として知られていた。川越の地名として古くからあり、文明十八年(1486)頃、この地方を遊歴した道興准後の『廻国雑記』に、「うとふ坂こえて苦しき行末をやすかたとなく鳥の音もかな」という歌がある。

昭和三十三年三月六日

川越市教育委員会

岸町熊野神社

境内は坂から見上げるような数十段の石段を登った上にある。境内入口の台輪鳥居と二の鳥居明神鳥居の先に拝殿・本殿が建立されている。参道の左右には境内社が祀られ、境内最奥には石塔型の末社群が立ち並ぶ。

御祭神:伊弉諾尊、事解男命、保食命、天照大御神、武南方命

境内社:参道の左に月見稻荷、右には靖国鳥居と神門の奥に御嶽塚が祀られ、塚の上には、御嶽神社・八海山神社・三笠山神社碑・大江大権現碑・日天社碑・霊神碑……など多数。境内最奥には、左から、御嶽神社・霊神・三峰神社・疱瘡神・榛名神社・稻荷大明神・鎮守熊野三社大権現・神明神社・秋葉神社・稻荷明神・八坂神社・戸隠神社・諏訪神社の順に祀られている。

由緒:勧請年月、縁起、沿革は不明。

その先で旧川越街道は国道254号線に合流する。国道254号線は少し先の「新宿(あらじゆく)町北」交差点で交差する国道16号線に右折し合流するが、旧街道は複雑な「新宿町北」交差点を歩道橋で渡ってほぼ直進し、県道39号線に入っていく。

ここから国道16号線を北東に進むと、時間と体力があれば寄ってみたい寺社がある。富士浅間神社、愛宕神社、仙波氷川神社、天然寺、長徳寺(仙波氏館跡)である。(今日の川越駅到着のあとに記述)

街道を先へすすめる。新宿北交差点を渡り、県道39号線を北上、350m程の最初の信号交差点の先セブンイレブンの直ぐ先の左の道を入ると「妙善寺」がある。

妙善寺

妙善寺は、道人山三心院と号する天台宗の寺院で、創建は寛永三年(1624)。開山は尊能。本尊は不動明王で智証大師円珍の作、脇侍は阿弥陀如来。小江戸川越七福神第一番「毘沙門天」の寺である。

本殿前に「川越さつまいも地蔵尊」が祀られている。

「川越さつまいも地蔵尊」建立由来記

川越と言えば、サツマイモと言われるほどイモの町として有名です。その歴史は約二百五十年以上あります。寛政の頃(1789~1801)江戸の町に焼き芋屋が現れ、その焼き芋用として、「川越いも」は発展し、有名になりました。

過去において、飢きんや戦争での食糧難を救ったサツマイモですが、現在は「美容食」「健康食」「宇宙農産物」として見直され、ひろく人々に愛されています。

瀬戸内海の島々には、江戸期、サツマイモで飢きんを乗越えたことから、イモを伝えた先人の徳を偲び、「芋地蔵」が各地につくられ残っています。いまは飢えることはなくなりましたが、逆に「健康」を願う人々は増えました。『サツマイモを食べて健康になろう』の祈りを込め、現代版の芋地蔵の建立を、平成七年九月に地元川越のサツマイモ関係者の間で思いました。

いま、川越のマチを歩いてみますと、各種のサツマイモ商品があふれていますが、昔、この妙善寺周辺でも美味しい「川越いも」がつくられていました。10月13日のサツマイモの日ですが、その日には、この川越いも地蔵を中心に、イモに感謝を表す「いも供養」(いもの日まつり)が妙善寺で催されます。

二〇〇五年 さつまいも伝来四百年記念

川越いも友の会

川越サツマイモ商品振興会

かわごえさつまいも地蔵尊奉賀会

社団法人小江戸川越観光協会

街道(県道39号線)に出て左折、30mの左に「菅原神社」の参道があり、長い参道の奥に「菅原神社 拝殿と本殿」と境内社「六塚稲荷神社」がある。

菅原神社

御祭神は、菅原道真公で、由緒は寛永元年(1624)、尊能法印が妙善寺を開山した際、その寺領に天神社として、ご分霊を勧請したことに始まる。そして、大正二年(1913)に、稲荷神社を合祀した際に現の名称へと改称したとされる。

境内社として「六塚稲荷神社」を祀っている。

六塚稲荷神社

御祭神は、保食命(うけもちのみこと)別名稲倉魂命(うがのみたまのみこと)正一位六塚稲荷大明神といわれる。創建は、天文十八年(1549)現在の朝日生命ビル付近にあった塚上に勧請される。大正二年天神社に合祀されその後昭和二十六年現社殿に奉還される。本殿は旧菅原神社の本殿。

街道(県道39号線)を北上。2つ目の信号・川越駅入口(東)交差点を左折すると、300m強で川越駅に到着する。今日はここまで。

時間と体力があれば寄ってみたい寺社、**富士浅間神社**、**愛宕神社**、**仙波氷川神社**、**天然寺**、**長徳寺**（**仙波氏館跡**）について記述しましたので、参考にしてください。

富士浅間神社

「新宿町北」交差点を歩道橋で国道16号線の北側で降り、16号線に沿って北東に進み、100m強の斜め左の道を入ると、50m程で右手に富士浅間神社の境内がある。神社は、通称「母塚」と呼ばれる「**円墳の古墳**」上に鎮座している。

鳥居の脇に「**占肩(うらかた)の鹿見塚(ししみづか)**」の碑がある。この辺りに「鹿見塚」というのがあったが、東武東上線開通時(大正三年)に壊されたという。

県指定・旧跡 占肩の鹿見塚

万葉集卷十四の

武蔵野に占(うら)へ肩灼(かたや)きまさでも

告(の)らぬ君が名うらに出にけり

という歌は古代日本人が多く住んでいた鹿を持し、その肩を焼いて吉凶を占った習慣によせた情緒深い歌であるが、この誕生地が長いこと謎だった。

この仙波の地には、父塚・母塚もふくめて古墳群が形成されていた。しかし、この鹿見塚は大正三年に消滅してしまったが、土地の小名にも「シシミ塚」「シロシ塚」と記録されている。シシとは鹿のことである。

建碑の場所は便宜上浅間神社の前を選んだのである。

平成四年三月

川越市教育委員会

神社へ登る階段の脇に「**浅間神社古墳**」と「**浅間神社の歴史と信仰**」の解説板がある。

浅間神社古墳(市指定・史跡)

円墳で、その規模は高さ五メートル、周囲(直径の間違い)四十二メートルである。(最も近い調査では、高さ5.8m、直径38mとなっている。)現在この古墳の頂上には、浅間神社が祀られており、このためかなり削られて墳頂部は平坦になっている。古墳のすその部分に低いところが見られることから周溝が巡っていたと考えられる。愛宕神社古墳と共に仙波古墳群の中では規模も大きく、群集墓が発生した初期の頃に築造されたものであり、六世紀の中頃のものであろう。仙波地域一帯が農業を専業とする人々によって村落が形づくられ、その指導者の墓として作られたものであり、川越市内では、的場古墳群、南大塚古墳群、下小坂古墳群のひとつである。

昭和六十三年三月

川越市教育委員会

浅間神社の歴史と信仰

当神社は康平年間(1058~65)、源頼義が奥州征伐の途次に分霊したことに始まり、長祿元年(1457)に太田道灌が再営し、永祿九年(1566)に北条氏の臣・中山四良左衛門が再興したという。

文政十一年(1828)、川越南町の山田屋久兵衛が近郷富士講中並びに有志老若男女の助力を受けて、拝殿一棟の再建と一丈余の岩室の上に更に一丈有余を新築したと棟札に記されている。

岩室前の石猿に天保四年(1833)の銘があることや、石碑類の多くが天保年間に造営されていることから、文政から天保年間に現在の形が整えられたと考えられる。(この岩室は、大正十二年の関東大震災により崩壊し間もなく再建したとの柵石がある。)

拝殿の天井は、中央部が折上格天井(おりあげごうてんじょう)になっており、江野樗雪(1812～1873)による百人一首歌仙像の絵がくみこまれている。

神社の祭神には木花咲耶姫命(このはなさくやひめのみこと)が祀られている。江戸中期、関東一円に浅間信仰が起り、富士浅間神社を分霊した当神社には、近郷の多くの村々が講を作り、寄進したことが石碑や柵石に刻まれている。

毎年七月十三日の初山には、子育ての神が転じて子宝に恵まれる神としても信じられ、新婚夫婦・幼児を抱いたお母さん方など毎年一万人にも及ぶ参拝客が訪れている。参拝客は、暑さに向かう夏の健康を願いあんころ餅を、夏の難病と疫病を追払い毎日を健やかに過ごせるようにと団扇を買い求め、お仲人や近親者に配る習わしになっている。

平成二十二年一月吉日

浅間神社総代一同

40段弱の階段を登ると、右手に「廿三夜塔」がある。社殿の裏には、溶岩で築いた富士山のような塚と噴火口をあらわした穴がある。

愛宕神社

富士浅間神社から国道16号線沿いに進み、「富士見町交差点」で国道を渡り左折、国道沿いに70m程の右斜めの道を入ると「愛宕神社」がある。ここの古墳(通称父塚)の上に社殿がある。

地形は、高さ六メートル、東西三十メートル南北五十三メートルの円墳で父塚といわれ川越市指定文化財になっています。鎌倉時代(1182～1331)いまから七～八百年前、武蔵七党の一つの村山党に属した仙波七郎高家の墓という説がある。

祭神は火産霊命で、十五九三年…文禄二年正月、山城の国(今の京都)の愛宕山に鎮座する愛宕神社から分霊したものと伝えられています。

古来より火伏の神、麻疹の神として信仰されてきました。麻疹が軽く済むようにと母親が子供を抱いて社殿櫓の下をくぐり抜ける習わしがあります。その祭礼は、七月二十四日で、七月十三日の浅間神社(母塚…初山)の後に行われています。

愛宕神社古墳(市指定・史跡)

仙波台地の東南端上に築かれたもので、かつてこの付近一帯には六つ塚稻荷の名称から考えても多くの古墳群が存在していたことがうかがえる。高さ六メートル、東西三十メートル、南北五十三メートルを有し、基壇のある二段築成の円墳で、幅約六メートルの周堀が東南の傾斜地を除いて巡っている。六世紀中葉期のものと思われる。現在は愛宕神社が祀られている。

昭和六十三年三月

川越市教育委員会

愛宕神社の東側下に「仙波河岸史跡公園」があり、河の名残りがあり、自然観察湿性地や林・休憩所・ベンチ・トイレがある。

駐車場から国道16号線を潜り、直ぐ右の階段を上った所に「仙波氷川神社」があり、境内には円墳の「仙波氷川神社古墳」がある。また、「仙波二郎安家」の山車蔵がある。

仙波氷川神社由緒

◇御祭神◇須佐之男命、倉稻魂命(うかのみたまのみこと)、市杵島姫命

当社の起源は古く、平安時代中期にまでさかのぼる。社伝によれば、後三条天皇の御代の延久元年(1069)、当地の武士仙波氏の創建とされ、代々にわたり、同氏の厚い崇敬を受けた。

仙波氏は、中世に盛んになった武蔵武士団の一つで、桓武平氏を祖とする村上氏から分かれ、この仙波の地を本拠としていた。長徳寺はその居館跡ともいわれ、現在の高階、牛子、福岡、大井方面にまでわたる広い地域を領有していたとみられる。

仙波氏初代家信に子、平太郎信平、二郎安家、三郎家行は、いずれも鎌倉幕府方の武士として武功があった。二郎安家は、建久元年(1190)源頼朝が大軍を率いて入洛した際に都入りし、三郎家行は、その後の承久の乱(1221)に際して、都まで攻め上がった。

仙波氏は室町時代末頃まで勢力を保持していたと思われる。

江戸幕府が開かれると、開府に深い関わりのあった仙波の地は、ほぼ全域が喜多院・東照宮に寄進され、幕府直轄の天領とされた。徳川家康公以来の將軍家ゆかりの故地として尊重され、幕末に至るまで歴代將軍の格別の配慮に預かった。

明治の入っても、当社は仙波の鎮守と仰がれ、明治十九年(1886)には、字氷川脇の稲荷社・八坂神社、及び扇河岸の巖島神社が合祀されて、今日に至った。

近隣に鎮座する仙波浅間神社(富士見町)、仙波愛宕神社(同)も古い歴史のある神社であり、当社と合わせて「仙波三社」として地域の人々の篤い尊崇を受けている。

御祭神須佐之男命は、天照大御神の弟神。神性勇猛の大神で、罪穢れや災厄を祓い清める「救いの神」として、また、諸産業の守護、家内安全・夫婦円満に靈驗ある「恵みの神」として全国各地の神社で祭られている。

倉稻魂命は、合祀社稲荷神社の御祭神。稲をはじめ五穀豊穰を守護される神として広く崇敬されている。

市杵島姫命は、合祀社巖島神社の御祭神。須佐之男命の娘の神。航海安全・水運守護に靈驗あり、導きの神、開運の神として尊崇されている。

氷川神社から国道16号線に出、北東に350m弱進むと左に「天然寺」がある。

天然寺

天然寺は、自然山大日院と号し、天台宗の寺院である。天文二十三年(1554)に開山、栄海上人によって創建された。本尊は木像大日如来坐像。当寺は小江戸川越七福神の寿老人を祀っている。

本尊木像大日如来坐像(市指定・彫刻)

像高一五九・八センチ、寄木造、彫眼、漆箔。胸前で智拳印を結び結跏趺坐する。

頭部内割部に建武二年(1335)、体部背板に永禄十三年(1570)の修理銘がある。

様式・形制から十一から十二世紀頃の造立と考えられる。後補の部分が多く、面部も大幅に削り直しを受けているが、市内に現存する仏像としては、最も古い作例の一つである。

平成四年四月十六日指定

川越市教育委員会

天然寺から国道16号線を170m進み、新河岸川の手前の階段を降り、20m程の三叉路を左折。坂を登ると右に「川越観音・長徳寺観音堂」があり、坂を少し上ると右に「長徳寺・山門」がある。当寺は「仙波氏の館跡」と推定されている。仙波台地の東端・崖の上にあり、東側は湿地帯。周囲に堀があり、北側に100m、南側に150mの堀があったとのこと。荒川低地を一望できることから、居館を造るには最適の場所である。

長徳寺

当寺は、宗派は天台宗で、冷水山清浄土院と号し、創建年代は不詳ながら、慈覚大師が開山だといひ、過去帳に「永正甲戌(1514)天台沙門實海」の名が残されていたといひます。本尊は阿彌陀如来で、喜多院の末寺でもあります。また、当地は、仙波氏館跡だといひます。本堂の右手の立派な観音堂には、白衣観世音菩薩坐像が安置されている。

『新編武蔵風土記稿』には「(大仙波村)長徳寺 天台宗、仙波喜多院末、冷水山清浄土院と號す、開山は慈覚大師なりと云へり、當寺に傳ふる古き過去帳の序に、永正甲戌佛涅槃天台沙門實海と記したれば、是人もし中興開山の僧などにや、本尊は彌陀を安ず。観音堂。観音は白衣の坐像にて長二尺、毘首羯摩が作と云。

市指定・史跡 仙波氏館跡

大仙波の長徳寺は天台宗の末寺で、「新編武蔵風土記稿」によると「永正甲戌(1514)天台沙門實海」の名が古い過去帳に記されていたという。もと若干の土塁と堀があったといわれ、小字に「堀の内」という地名も残っているところから、仙波氏の館跡だと推定されている。「保元物語」に仙波七郎高家、「吾妻鏡」に仙波平太・同太郎・次郎・弥三郎・左衛門尉などの名がみえ、これらは在名をもって氏としたことが考えられる。ただし郷庄の唱えでは大仙波村は山田庄に属し、仙波庄を唱うる村はこれより南部の市内高階地区と上福岡・大井・富士見・三芳の各市町に広がっているものが多く、仙波氏の支配した荘園と考えられる。

昭和五六年一月

川越市教育委員会

以上